

文化学園長野高等学校(カンボジア海外研修)

パンドラの箱 ―先進国が見るべきリアル―

文化学園長野高等学校の生徒は、カンボジアへの研修を通じて、SDGsで示される課題が単なる知識ではなく、現実の深刻な問題であることを実感しました。研修の中で見聞きした「プラスチックごみ問題」や「貧困の連鎖」を切り口に、先進国と途上国の関係性、そして本当の「持続可能性」とは何かについて深く掘り下げています。

カンボジアで目にした「現実」

現地では、大量のプラスチックごみが生活圏にあふれており、その背景にはかつて自然素材で生活していた人々が、生活様式の変化に意識が追いつかず、プラスチックも自然の延長線上にあると誤認している現状がありました。

研修で訪れたゴミ山では、地球温暖化に関係するメタンガスの発生、森林伐採、健康被害、貧困など、多様な問題が絡み合っている様子を目の当たりにしました。幼い子どもたちが劣悪な環境下で働いている姿には、深い衝撃を受けたといいます。

SDGsを「知識」から「実感」へ

これまで授業などで学んできたSDGsの課題は、あくまでも「知識」としての理解に留まっていたことに気づかされ、初めて「自分ごと」としてSDGsに向き合う転機となりました。「SDGsは人類が開けてこなかったパンドラの箱」――その表現が示す通り、この活動を通じて生徒は、現実には起きている不都合な真実に目を向ける必要性を痛感しました。

社会の構造と人間の倫理

貧困層に押し付けられる負担、先進国が築いてきた消費社会のあり方、不況を恐れて進められる経済の仕組み…。ウルグアイのムヒカ元大統領のスピーチを引用しながら、生徒は「真の豊かさ」とは何かを問いかけ、倫理的な行動選択の必要性を訴えました。